

オーディオ実験室収載

アナログ再構成後の活用(28) —ベートーベンを聴く(27)—

1. 始めに

前報(27)に引き続き、ベートーベンのアナログ盤を試聴していきます。

2. アナログシステムについての改善の試聴方法

試聴は LINN LP-12 のシステムでアクセサリー関係も最新情報に基づいて実施し、要時 Garrad 401 のシステムも加えます。これまでの状況は、オーディオ資料室の再生経路と変更点 4 に要約しています。なお、バイワイヤリングのスピーカーケーブルにケーブルチューナーが装着されています。さらに、追加の変更点については、オーディオ資料室の再生経路と変更点 5 とオーディオ資料室の再生経路と変更点 6 に要約しています。

再生経路は、LP-12 のアームの調整も終わりましたので、次のとおりです。

LP-12→AACU-1000→Stage1030→Brooklyn DAC+→AACU-1000→
P&G フェーダー→300B シングルアンプ

今回は引き続きベートーベンのピアノソナタを聴いていきます。

今回取り上げる盤は、次のアナログ盤です。

TRIO RECORD PA-1116

ピアノソナタ 31 番作品 110

ピアノソナタ 32 番作品 111

エリック・ハイドシェック

3. アナログシステムについての改善結果の試聴結果

前報(27)と同じく、ハイドシェックによる一連のベートーベンのピアノソナタ集です。ベートーベンの後期のピアノソナタ 31 番は、地味なところもありますが、ハイドシェックにかかると詩情豊かなものに変わります。

一方、ピアノソナタ 32 番は、スタンウェイの持ち味をいかしつつ、切れ味がよく、剛直なところもよく表現されています。

4. まとめ

アナログシステムの再構成の結果、ハイドシェックによるベートーベンのピアノソナタの解釈がよく理解できるようになりました。

以上